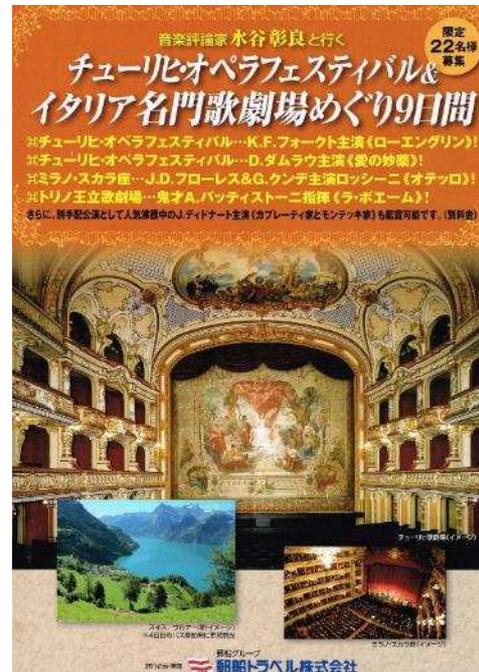


チューリヒ・オペラフェスティバル&イタリア名門歌劇場 9 日間

旅と公演のレポート 水谷 彰良

筆者の同行するツアー「チューリヒ・オペラフェスティバル & イタリア名門歌劇場めぐり 9 日間」(郵船トラベル、2015 年 7 月 3～11 日) から無事帰国しました。観劇したのはチューリヒ歌劇場の《ローエン格林》《愛の妙薬》《カプレーティとモンテッキ》(7月4日、5日の午後と夜)、ミラーノ・スカラ座《オテッロ》(7日)、トリノ王立歌劇場《ラ・ボエーム》(9日)の五つ。以下、簡単に報告します。

成田を7月3日に発ち、その日のうちにチューリヒ到着。暑いなの…なにしろ夜になっても気温 35 度なんです。以後連日 35～38 度の異常猛暑、いや酷暑の毎日で、体感的には 40 度という感じ。パリでは7月1日に 39 度を超え、ほどなくドイツの一部でも観測史上最も暑い 40 度超を記録。筆者はヨーロッパで 5 万人以上が亡くなった 2003 年 8 月にもイタリアにいましたが、それに匹敵する暑さです。



◎《ローエン格林》(7月4日)

そんななか最初に観劇したチューリヒ歌劇場《ローエン格林》は、2012年に同歌劇場の総裁に就任したアンドレアス・ホモキによる演出。昨年4月のウィーン国立歌劇場プレミアに続いて9月にチューリヒのプレミアを迎えました(共同制作)。ローエン格林役のクラウス・フロリアン・フォークトが足を負傷し、左膝にギブスをはめての出演です。歩き方もぎこちなく、重心がずれ、腰に負担をかけながらも、持ち前の甘美な声で見事な演唱を繰り広げました。

エルザ役のエルザ・ヴァン・デン・ヘーヴァー [ヒーヴァー] は、2013年メトロポリタン歌劇場《マリア・ストゥアルダ》の映像を通じて評価していましたが、期待にたがわぬドラマティックな発声歌唱で聴き応え充分。オルトルート役のペトラ・ラング、テルラムント役のマーティン・ガントナーの好演も相俟って質の高い上演です。問題は女性指揮者シモーネ・ヤング。2005～15年ハンブルク歌劇場の総支配人と音楽監督を兼務し、チューリヒでも人気が高かったのですが、前奏曲から音が大きく、「弱音じゃ無いんかい！」と突っ込みたくなるほど。オーケストラをガンガン鳴らし、迫力ある音響に圧倒されましたが、もっと繊細な表現があってもいいのでは？



チューリヒ歌劇場の前で記念撮影



《ローエン格林》のカーテンコール

◎《愛の妙薬》(7月5日・午後)

翌5日の《愛の妙薬》は、アディーナ役ディーナ・ダムラウの降板を告知されて慌てましたが、代役のエレオノーラ・ブラット (Eleonora Buratto) が大変見事でした。1982年生まれだから今年33歳。名前に見覚えがあるので調べたら、2007年にスポレート国際音楽コンクールで優勝し、スカラ座で研修してムーティに評価され、2007年ザルツブルク聖霊降臨祭のヨンメリ《デモフォオンテ》に抜擢されました。以後ムーティの棒で活躍し、2014年ローマ歌劇場来日公演《シモン・ボッカネグラ》で降板したフリットリの代わりにアメーリアを歌ったと言える思い出した方も多いでしょう。この日も広い音域に卓抜なアジリタを駆使し、なかなかの逸材と感心しました。

ネモリーノ役のパヴォル・プレスリク（1979年スロヴァキア生まれ）、ベルコーレ役のマッシモ・カヴァッレッティ、ドゥルカマール役のルーチョ・ガッロも好演。グリシャ・アサガロフ演出の舞台はパステル調のカラフルな色彩で、左右にスライドする古典的な書割も使われます。ちなみに筆者は2010年11月にフローレス主演で同じ舞台を観劇し、そのときは指揮者ネッロ・サンティの旧弊な音楽作りに呆れました。今回は昨年ROFの《セビーリヤの理髪師》を指揮したジャコモ・サグリバンティとあって注目しましたが、チューリヒの二軍とおぼしき管弦楽団がダレた演奏をしました。ヒョロツとした今どきの若者指揮者とあってオケがなめたのでしょうか。



《愛の妙薬》のカーテンコール

◎ 《カプレーティとモンテッキ》（5日・夜）

早めの夕食をとり、夜の《カプレーティとモンテッキ》を観劇。前日会場でお会いした会員・角岡さんから、「初日を見たらジュリエッタ役のオルガ・クルチンスカ（Olga Kulchynska）が素晴らしく、もう一回見ることにしました」とお聞きしていました。名前に聞き覚えがなく当然。1990年ウクライナのリウネに生まれ、キエフの音楽院で声楽を学んで2011年からさまざまな国際声楽コンクールで賞を受けてポリショイ劇場の研修所で研鑽を積み、2014年にデビューしたピカピカの新人です。今年25歳。そしてこれがロシア以外での本格デビューとのことですが、ネトレプコのデビューしたてのように瑞々しく、輝いています。第二のネトレプコ発見！といった印象です。



《カプレーティとモンテッキ》のカーテンコール

ロメオ役のジョイス・ディドナートは、2013年5月のロイヤル・オペラ《湖の女》のときもそうでしたが、ヴィブラート過多の発声でいまひとつ。表情と演技はいいけれど、声と歌唱で新人クルチンスカに負けた感じがします。テバルド役のテノール、バンジャマン・ベルネーム（Benjamin Bernheim）も若き逸材で好印象。指揮がチューリヒ歌劇場の音楽監督ファビオ・ルイーダとあって、オーケストラも前の二つとはうって変わって引き締まった演奏を繰り広げました。

演出はクリストフ・ロイ。舞台をぐるぐる回転させて幾つもの部屋を見せ、対立する党派抗争の犠牲者らしき死体がそこかしこに転がり、ジュリエッタの子供時代とおぼしき少女も登場します。この上演では歌と音楽に集中するため演出に頭を巡らせず、「舞台を回しすぎるなあ」「ずっと横たわっている死体役の助演も大変だけど、人形でないからリアリティあるな」…なんて思いながら見ていました。



コモ湖畔、ベッリーニのモニュメント

翌6日は移動日で、専用バスでコモ湖畔のモルトラージオ（Moltrasio）に宿泊。船着き場からホテルに向かう道に、ベッリーニのモニュメントがありました。そう言えば、ベッリーニはコモ湖畔のジュディッタ・パスタの別荘で《ノルマ》を作曲したのですね。前夜《カプレーティとモンテッキ》を観劇したばかりで、すごい偶然です。

◎ 《オテッロ》（7月7日）

コモ河畔からバスで移動したミラーノも暑い暑い。38度はあるんじゃないかしら…へトへトになりながらもスカラ座博物館を訪問しました。昼食後にリコルディで買い物を、と思ってガッレリアのアーケードに行くと、プラダとフェルトリネッリの看板を掲げて閉まっています…リコルディが無くなった？…移転か？…どこに？…聞いてないゾ！…クソ暑い中ガッレリアを探しても無いものは無い…ならば Messaggerie Musicali に行こうと思って歩いて行くと、こちらも店が無い！…メッサッジェーリエ・ムジカーリが潰れた？…

ディスクも楽譜も通販で買えるご時世では、大きな店舗を維持するのが大変なのでしょう…そういえば、筆者もネットでばかり物を買っているなあ、と反省しきり。便利だけど、つまらない時代になりましたね。

それはともあれスカラ座の《オテッロ》ですが、こちらもある意味「予想外」でした。ユルゲン・フリムの演出が視覚的につまらないのです。背後と両サイドを巨大なカーテンで囲い、第1幕は舞台中央に宴会のテーブルセット、右手



スカラ座博物館にて

に大きな椅子があるだけ。第2幕は安っぽいガーデンチェアをたくさん置いただけ…他にもちょこちょこ物はあるけれど、煎じ詰めればそれだけ。第3幕は殺風景な舞台にヴェネツィアの黒いゴンドラが現れ、「柳の歌」ではハーブ奏者を乗せた台が人に押されて舞台を横切ります。デズデーモナがゴンドラの上で刺殺されると背後のカーテンが消え、資材の置かれた舞台裏が丸見えになる…だから何だよ、劇とぜんぜん関係ないじゃん。ただの手抜き、経費削減か！？

久しぶりのスカラ座。「あれ、こんなに音響が悪かったっけ？」と不思議なほど音が飛んできません。舞台を囲むカーテンが消音してるみたい…筆者は3階パルコの1列目ですが、平土間の観客もみな音が小さいと不満げです。歌手はオテッロ役のグレゴリー・クンデが力強い発声と迫力で突出し、ロドリゴ役のファン・ディエゴ・フローレスを圧倒しました。でも二人とも記譜されたハイDを歌わず、肩すかしを食らった感じ。イアーゴ役のエドガルド・ロチャも健闘しましたが、劇場の音響の問題でガツンと聞こえません。デズデーモナ役のオルガ・ペレチャツコは発声が固く、歌に伸びやかさを欠き、カーテンコールにブー！が飛びました。

指揮者は当初予定のジョン・エリオット・ガーディナーからDVD化された2012年チュエリヒ歌劇場プロダクションの中国人ムハイ・タン(Muhai Tang)に代わり、それはそれで期待したのですが、テンポがやけに遅くて旋律が間延びし、歌手たちも歌い難そう。かと思えば、後奏だけやけに速くして音楽のフォルムを損ねています。クンデやフローレスの方がロシーニの音楽とテンポを良く判っているのに！

昨年観劇したザルツブルク上演のアンサンブル・マテウスも伴奏に精彩を欠きましたが、スカラ座の場合は指揮者タンのせいで音楽の乗りが悪いみたい。ちなみにスカラ座におけるロシーニ《オテッロ》の上演は145年ぶりとあって鳴り物入りの公演でしたが、一流の歌手を揃えても演出と指揮者がこれではいいとこなしです。

あ、書き忘れましたが、この演出にはいろいろ不可解な点がありました。黒板に書かれたアラビア文字にイタリア語で「不貞 (infida)」「嫉妬 (gelosia)」などと書き足すのですが、誰が誰に、どちらの言語を教えているのかイマイチ判りません。最終場も意味不明。イアーゴが平土間の背後から現れてピットに向かって歩み、なにか歌うと背後から歩いてきたデズデーモナの分身のような女性(助演)と抱き合います。イアーゴは死んで最終場に登場せず、歌うパートも無いのに何やねん、と目と耳を疑いました。ルーチョの一節を歌ったのかどうか、一瞬の出来事なので判然としません。でも勝手に変えるのは反則！この上演でイアーゴがどこを歌ったのかご存知の方は、ご教示ください。

《オテッロ》の舞台写真は、スカラ座のサイトにて。↓

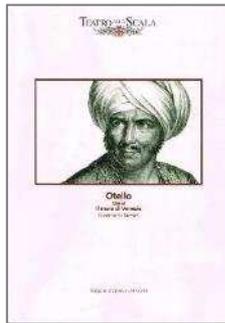
<http://www.teatroallascala.org/it/stagione/2014-2015/opera/otello.html>

◎ 《ラ・ボエーム》(9日)

翌8日はトリノーに移動して観光と宿泊。9日はバローロの里を観光してワイナリーで試飲し、夜にトリノー王立歌劇場で《ラ・ボエーム》を観劇しました。席は平土間中央ブロック8列目で音響も良く、アンドレア・バッティストーニの指揮ぶりも良く見えました。ミミは当初予定のジャンナタージオからバルバラ・フリットリに変更され、最初の2幕はやや声の衰えを感じましたが、第3幕のソロからヴェテランの上手さを発揮して第4幕終盤も説得力がありました。ムゼッタは、当初予定のガンペローニから代わった今年28歳のマリア・テレーザ・レーヴァが運葉なキャラクターで好演。ムゼッタに続いてクレモーナでミミを歌うソプラノです。



《オテッロ》のプログラム表紙と当日の配役表



《オテッロ》のカーテンコール



バローロの里のワイナリー

ロドルフォ役のステファノ・セッコ、マルチェッロ役のマルクス・ヴェルヴァら4人の男声陣も秀逸で、アンサンブル・オペラとしても充実していました。演出は同歌劇場専属らしきヴィットーリオ・ボッレリによるもので、他の写実的な演出…例えばゼッフィレリ…をアレンジし、突出した個性に欠けるものの視覚的な不満はなく、隅々まで透徹したパティストーニの棒も相俟って大満足でした。終わり良ければすべて良し…ツアー最終日をトリノの《ラ・ボエーム》にしたのは、その意味でも正解でした。



《ラ・ボエーム》のカーテンコール

以上、三都市三劇場で観劇した5演目について簡単に記しました。突然の異常猛暑で体調がおかしくなるのは歌手も同じ。あの暑さの中でよくぞここまで歌い演じたものだ、というのが正直な感想です。実はトリノにもう一日いればシラグーザとキアラ・アマル主演《セビーリャの理髪師》の初日を観られたのですが、日本ロッシーニ協会会員5人と筆者を含む20人のツアーで自分だけ残って《セビーリャの理髪師》を見るのはいかなものか、と考え断念しました。来月実施の「ペーザロ・ロッシーニ音楽祭&ザルツブルク音楽祭9日間」(8月17~25日)も楽しみです。

付記：本稿は日本ロッシーニ協会メールマガジン「ガゼッタ」第105号(2015年7月15日配信)の
文章に写真を増補した書式変更版です。 (水谷彰良)



モダンなデザインのトリノ王立歌劇場の入口と内部